

ring like sign 病変に対し多種のモダリティによる詳細な評価を行った症例

【目的】冠動脈 CT での ring like sign (RLS) は、vulnerable plaque の特徴的所見と考えられる。当院でも CT 検査で RLS を認め、PCI を行った症例の約 50% が slow flow を起こしており、治療戦略を検討するうえで RLS の詳細な性状評価は重要と考えられる。**【方法】**急性冠症候群を疑った患者に対し、plain 撮像も加えた冠動脈 CT 検査を行った。RLS を認めたため ring 部の詳細な解析と造影前後で変化の有無を検討した。冠動脈造影検査に移行し IVUS、OCT で RLS を詳細に観察したうえで治療戦略を決定した。**【結果】**CT では ring 部を中心に、低 CT 値 (OHU 未満) のプラーク、positive remodeling や spotty な石灰化を認めた。cross section 像を造影前後で比較すると、plain 画像でも確認された明瞭な ring の中に、造影により明らかな CT 値の上昇がみられた部分があった。その部分の IVUS 画像は石灰化粒を含む attenuated plaque を認め、OCT 画像では新生血管の増生とマクロファージの集簇と思われる所見を認めた。危険度の高いプラークと予想されたため、PCI は filtertrap による遠位塞栓保護を行い安全に血行再建することが出来た。**【結論】**ring like sign は vulnerable plaque の病理学的特徴を多く有している high risk plaque と予想され、それらの特徴を捉えるためには多種のモダリティによる多面的な評価が重要と考えられた。